

デノ格の名詞と名詞とのくみあわせ

A Study of Combinations of a Noun

followed by the Case-Marker “Deno” and another Noun

大 平 真紀子 OHIRA, Makiko

1. はじめに

連語論の研究において、連用格の名詞と動詞のくみあわせの記述は詳しく、そのくみあわせのタイプを網羅的に示しているが、複合連体格の名詞と名詞のくみあわせに関しては、一部の研究を除き、あまりされてきていない。その中で、複合連体格の名詞を《かざり》にする連語に関する先行研究として彭広陸（1999）が挙げられる。

彭は論文の中で、《かざり》も《かざられ》も名詞で、《かざり名詞》が複合的な格の接尾辞を伴う連語を対象に分析を行っている。そして、複合連体格の名詞をかざりにする連語について、次のようにその重要性を指摘する。

じっさい、名詞の連用格の体系は8格からなりたっているのにたいして、連体格の体系は6格からなりたっているとすれば、いちいちの格の意味がことになってくるばかりではなく、意味領域のわけあいと対立の関係がふたつの体系ではことになってくるのは当然のことである。したがって、それぞれの体系の内部でいちいちの格の意味、これらの意味のあいだの関係をしらべあげていかなければならない。さらに、連体格の名詞によってかざられる《かざられ名詞》が動作性名詞に限定されないとすれば、たとえば「彼女への恋文」「民主主義への道」「大統領への野心」のようなくみあわせが成立するとすれば、名詞の連体格、たとえば「へ」の意味領域は、その連用格「へ」の意味領域をのりこえて、ひろがっていく。筆者が学校文法的なアプローチを拒否して、名詞の格変化の、あたらしい体系のくみたて方を採用しなければならないのは、こういう理由による。名詞の格の意味と機能が、関係するあい手が動詞であるか、それとも名詞であるかによってことになってくるのは、当然のことである。したがって、名詞の連体格と連用格とはその意味領域において当然ことになったものになる。《連体格のかざり名詞》と《かざられ名詞》とのくみあわせは、《連用格のかざり名詞》と《かざられ動詞》とのくみあわせから決別して、それ自身の独自の法則にしたがって発展していくところの、独立した体系をなしているのである。〈略〉

現代においては、動詞の名詞化、動作性の漢語名詞の生産は、ひとつの文のなかにたくさんの情報、複雑な論理をつめこむことの必要とからんで、急速につよまっている。このことが名詞の連体格の使用の必然をつよめ、使用の範囲をひろげていくのである。最近の文章、評論の文章などにおける名詞の連体格の使用の頻度がきわめてたかくなっていることは、このことを証明してくれる。

(彭 (1999 : 109-110))

彭の考察には朝日新聞、読売新聞、朝日新聞・天声人語、佐多稲子『時に佇つ』、藤原正彦『若き数学者のアメリカ』、阿部公房『壁—S・カルマ氏の犯罪』から用例を収集してある。彭は上記の引用にある「最近の文章、評論の文章などにおける名詞の連体格の使用の頻度がきわめてたかくなっている」ことや「この種の、展開しつつある連語を理解することは、今日の日本の新聞、雑誌の文章をよみとるために、実用的にきわめて重要なことなのである」といった記述からもわかるように、新聞や雑誌の中での複合連体格の展開にまず着目している。

名詞の連体格の使用を書き言葉から調査するのは妥当だと思われる。新聞の見出し、本や映画などのタイトルには、少ない字数の中に多くの情報を盛り込もうとしてよく名詞の連体格が使用される。そこで筆者も書き言葉から調査を始めようと思う。

彭は論文全体を通じて、連用格との対応を強く意識した記述をしている。それは次のような記述によって認められる。

(複合連体格のばあい、) かざられ名詞が主として動詞派生の名詞か、あるいは動作性の漢語名詞であって、内的な、従属的な関係が、動詞を《かざられ》にする連語からもちこまれている。そうであれば、動詞を《かざられ》にする連語と名詞を《かざられ》にする連語との間には照応の関係が生じてくる。

(「複合連体格の名詞を《かざり》にする連語」 p.118)

しかし、筆者の収集した用例からは、かざられ名詞が動作性の名詞でない場合も多く見られた。「動作性の名詞」の定義次第であるし、あとに書くように名詞が動作性の名詞かどうかを判断するのはすぐには難しいものもあるが、かざられ名詞が純粋な動作性名詞でないものは概算で50%近くになる。かざられ名詞が動作性名詞であるか動作を表す名詞でないものであるかは、連語のタイプを変える大きな要因であるため、重要となる。たとえば、「息子にプレゼントを郵送する」という連語は、名詞の連用格では「息子へのプレゼント」とも「息子への郵送」ともなる。しかし、そのむすびつきのタイプは、前者は「あい手と贈られる物のむすびつき」なのに対し、後者は「あい手と贈る動作のむすびつき」であり、むすびつきの意味的タイプが異なる。前者のタイプの例としては他に、「彼への手紙」「少年へのランドセル」などが考えられる。一方、後者のタイプの例としては、「彼女への送付」なども挙げられるが、贈る物が抽象化したタイプとして、「被災者への支援」などもこのグループから広がって作られる連語となるだろう。このように、かざられ名詞が動作性名詞であるか動作を表す名詞でないものであるかは連語のタイプを変える要因となる。そのため、本稿ではか

¹ 文脈上必要であるため、大平が場合を明示した。

ざられの名詞のカテゴリカルな意味によってもタイプ分けを行いたい。

ここで考えておきたいのが、「動作性名詞」と「動作を表す名詞でないもの（以降、非動作性名詞と呼ぶ）」についてである。動作性名詞か非動作性名詞かを考える上で注意しておかなければならないのが、名詞の語構成と転成の問題である。鈴木（1978）は、連語の研究にあたって、語構成と転成に注意を払うべきだとしている。

なお、カテゴリカルな意味は、語構成のうえに反映されていることがすくなくないが、この点にも注目しておく必要がある。たとえば、「署名者」「目撃者」などは、語構成のうえで、「署名—者」「目撃—者」のように、対象へのはたらきかけを意味する動詞的な成分をもっていて、そのことが、行為者の名詞であることをじゅうぶんに保障しているわけだが、「師匠」「選手」となると、そのような語構成のうえでの分析は不可能であって、それだけ、対象へのはたらきかけを意味するということの保障がふたしかとなっている。この例にかぎらず、連語の研究には、かざりにしろかざられにしろ、語構成のうえでの特徴に注目する必要があることがすくなくないということを特に強調しておく。

また、連語の研究にあたっては、転成にも注意を払う必要がある。なぜなら、転成という語彙論上の現象が、連語の構造を複雑にする要因のひとつとして無視できないからである。周知のように、ある特定の品詞に所属する単語は、一定の条件にしたがって、別の品詞に転生することができるのだが、そのばあい、単に単語の転成にとどまらず、その転成とともに、まえの品詞に固有な連語論的なむすびつきをも、そのまま、転成さきの品詞のつくる連語（主として、かざられに使用される連語）のなかへ移入させてしまうということがおこる。とりわけ、名詞を核とする連語の場合には、動詞や形容詞（いわゆる形容動詞をふくむ）からの転成によるものがすくなくなく、結果として、連語の構造を多様なものにしてしまっている。したがって、ノ格の名詞と名詞とのくみあわせの研究にあたっては、転成という現象にじゅうぶん配慮する必要があるだろう。

（鈴木（1978：18））

語構成上、動詞的な成分を持った名詞とそうでない名詞は連語のタイプに影響を及ぼすかもしれない。そのため、用例を分析するにあたっては慎重に取り扱う必要がある。本稿では、「目撃者」や「地下での実験会」の「実験会」などのような語は、語全体として「目撃した人」を表したり、「会」という「イベント」を表すものであり、動作そのものを表す語ではないため、ひとまず非動作性の名詞として扱う。一方、「広島被服支廠での交渉経過」の「交渉経過」、「陸側での砲撃開始」の「砲撃開始」などは、全体として動作を表すので、本稿では動作性名詞として扱う。漢語に関しては、特に動作性名詞か非動作性名詞かを判断するために、本稿では『分類語彙表』の用の類に語彙が

ストアップされているかどうかを参考にした。「経過する」「開始する」などは用の類に登録されていたので、動作性名詞に、「会議」は「会議する」という語が登録されていなかったので、非動作性名詞として考察している。なお、「生活する」「仕事する」などは語彙として登録されているが、「日本での生活」「日本での仕事」のように名詞の複合連体格のかざられとなったとき、動作性が薄れるように思う。

彭では、かざられが動作性名詞のものも非動作性名詞のものも同じむすびつきとして説明されている。この点を区別し、本稿ではかざられが動作性名詞のものと非動作性名詞のものとの違いに言及する。しかし、彭は一方で、かざられ名詞の多様性を認める記述もしている。

しかし、連体格の名詞を《かざり》にする連語と連用格の名詞を《かざり》にする連語とは、意味的な関係において、すべてのばあいには照応の関係があるとはかざらない。《かざられ》としてはたらく名詞は、動詞派生の名詞を乗り越えて、はるかに多様な人間活動、この活動に参加するところの人や物をとらえていて、それらの名詞をかざられにする連語は複雑なものへと発展している。

(彭 (1999 : 118))

本稿では、名詞の連体格の中で、デノ格の名詞と名詞のくみあわせについて記述する。彭がデノ格の名詞の連語について、具体的にどのような意味的タイプを認めているのか、下に挙げる。

対象的なむすびつき…車での逃走

規定的なむすびつき { 状態規定的なむすびつき…平服での勤務
根拠規定的なむすびつき…原則論での拒否
方法規定的なむすびつき…大声での演説

状況的なむすびつき { 空間的なむすびつき { 動作のおこなわれる場所…学校での学習
出来事のある場所…北部一帯での水不足
人や物、それらの特徴のある場所
…伊豆でのエリツイン
動作のおこなわれる場面…雨のなかでの試合
時間的なむすびつき…ハーフタイムでの寺西コーチの指示
原因的なむすびつき…仕事でのつかれ

(用例は彭 (1999) より)

² しかし、『分類語彙表』の用の類に登録されている、いないだけで機械的に分類したわけではなく、語彙的な意味を考えた上で分類した。

デノ格の名詞と名詞とのくみあわせには大きく3つの連語のタイプがある。「対象的なむすびつき」、「規定的なむすびつき」、「状況的なむすびつき」である。

対象的なむすびつきは、「動作とその動作の成立にとって必要な手段との間の関係」をとらえている。かざり名詞が具体的なものではなく人間の状態をさししめようになると、対象的なむすびつきから規定的なむすびつきに移行していく。規定的なむすびつきは何によって動作の特徴を規定しているかということによって3つに下位分類できる。動作主体の状態で動作を特徴づけている場合を「状態規定的なむすびつき」、かざり名詞がかざられ名詞の差し出す動作の成立の根拠あるいは理由づけを明らかにしている場合を「根拠規定的なむすびつき」、かざられ名詞に差し出される動作・活動の方法をかざり名詞が差し出している場合を「方法規定的なむすびつき」としている。

動作との関係において、場所や時間を規定するむすびつきを「状況的なむすびつき」とし、それは空間的なむすびつきから始まって、「時間的なむすびつき」、「原因的なむすびつき」へと下位タイプに分かれていく。彭はこの状況的なむすびつきが圧倒的に多いという。この、彭の分類についても再検討を行いたい。

2. 調査の目的と方法

本稿では、デノ格のかざられ名詞の動作性、非動作性に注目して分析し、彭の分類の再検討を行う。さらに、連用連語とデノ格の連語の違いについても考えたい。考察に用いた用例はCD-ROM版『新潮文庫の100冊』から収集したものである。CD-ROMに収録してある本のタイトルは最後に記す。

3. 考察

彭の研究では、デノ格の名詞と名詞のむすびつきはかざられ名詞の性質から大きく3つに分類してある。「対象的なむすびつき」「規定的なむすびつき」「状況的なむすびつき」である。しかし、デノ格の用法には、日本語記述文法研究会（2009）で取り上げられている「私たちが調査する」のような「主体」を表す用法がある。とすれば、複合連体格の名詞をかざりとする連語でも主体的なむすびつきの存在を検討しなければならない。実際、筆者の収集した用例からはかざられが主体を表す連語の例も1例ではあるが見つかった。

- (1) 報知新聞が確実な情報だと主張したのは、上層部でのこの決定をいち早く知っていたためだったのであろう。(人民は弱し 官吏は強し)

「上層部」は「私たち」のように主体となる個人を表すわけではないが、主体となる団体を表す。その主体となる個人が、「決定」という動作性名詞を修飾している。言語学研究会編（1983）によると、二つの単語がくみあわさって作り出す単語のむすびつき方には、「陳述的なむすびつき (predicative)」「従属的なむすびつき (subordinative)」「並列的なむすびつき (coordinative)」の

タイプがあり、そのうち従属的なむすびつきのみを連語とみなす。

ふたつの単語の従属的なむすびつきのみを連語とみなすのは、それが陳述的なむすびつきとは、ひとしく構文論的なむすびつきであるとしても、異質であるということの確認から出発する。じっさい、文のくみたてのなかに存在している従属的なむすびつきは、このむすびつきをつくっている単語の語彙＝文法的な特性に依存しているといっても、その単語が文のなかにしめているポジション、あるいは機能に依存していない。

(言語学研究会編 (1983: 5))

「上層部での決定」は、「上層部」という主体が「決定する」という動作の主体であるにとらえ、陳述的なむすびつきであるにとらえることもできるかもしれない。しかし、ここで扱う「決定」は動作名詞ではあるが動詞ではない。その意味では、陳述的なむすびつきではない。それではこのデノ格の名詞はどこから来たのだろうか。

連用格のデ格に、「私たちで調査した」などの主体を表すデ格がある。この主体を表すデ格が、デノ格にも引き継がれ、主体的なむすびつきを作っているのではないかと考える。奥田 (1983) には、デ格の名詞と動詞とのくみあわせに主体的なむすびつきを認めてはいない。しかし、「私たちで調査した」「私たちでの調査」のかざり名詞は、かざられ名詞の主体となっていることは否定できない。

そもそも、どうしてデ格、デノ格で主体が表されるのだろうか。以下の例を見てほしい。

- (2) *私での調査／*私で調査した
- (3) ○私たちでの調査／○私たちで調査した
- (4) ○役員会での調査／○役員会で調査した
- (5) ○わが国での調査／○わが国で調査した
- (6) ○私のほうでの調査／○私のほうで調査した

主体が「私」という個人だと非文となるが、「私たち」や「役員会」のように団体を示す単語が来ると言えるようになる。「わが国」のように、国は一つであるがそこに構成員が存在する場合も同様に可能なむすびつきになる。さらに、「私のほう」という、やはり単純な個人を表すのではなく、「私たち」「私たちのグループや団体」という意味ととらえられる。これらの単語がかざり名詞に来た場合、デ格、デノ格で主体を表すことができるようになる。これは、集団になることによってそ

³ (3)のデノ格の名詞の連語、「私たちでの調査」に関して、かざられ名詞が「調査」の場合は使用できるが、かざられ名詞が「決定」になり、「私たちでの決定」となると少し不自然になる。これが「調査」と「決定」の語彙的意味の違いによるものなのか、文脈によるものなのか、また別の要因なのかについては別の考察が必要である。

こに「場」のようなものが生じ、そこからデ格、デノ格での使用ができるようになってきているということであろう。つまり、「場」という意味では、状況的なむすびつきである。状況的なむすびつきの中から、主体ともなれる意志を持った個人や団体が名詞がかざられに来たとき、主体的なむすびつきとなっていくのではないだろうか。

3. 1. 対象的なむすびつき

3. 1. 1. 手段＝動作のむすびつき

かざられ名詞が表す動作や事柄の方法をかざり名詞が表している場合がある。かざり名詞はかざられ名詞で表される動作や事柄の手段・方法を表す。かざり名詞には具体名詞が来、かざられ名詞には動作を表す名詞が来る。「ある手段を用いてある動作を行う」という関係を作る。手段・方法的なむすびつきは、今回の用例の中ではあまり見られなかった。そのため、かざられ名詞の語彙の意味を特徴付けることは難しいが、「報告」「講義」のような言語活動を示す単語が例として見られる。

連用格の連語の場合、手段・方法的なむすびつきは種類も数も多く見られるが、複合連体格の連語においてはあまり使われないということが分かる。(10)「判定での勝利」は、原因的なむすびつきとも考えられる例である。「判定での」は、「KOでの」「不戦勝での」と並んで手段や方法を表す。しかし、「勝利」とくみあわさったときに「勝利」の語彙の意味の中にある結果性によって、原因＝結果のむすびつきに近くなる。

(7) 会社の上層部は彼らの書面での報告も読んでいるはずなのに、(山本五十六)

(8) 英語での講義、学生指導という点を考慮されると、日本人であることの不利が表面に出てくると考えられた。(若き数学者のアメリカ)

(9) 星の秘書課長にまで、札幌での誘惑の手をのばしはじめた。(人民は弱し 官吏は強し)

(10) 韓国で闘うということは、ノックアウトでしか勝てないということを意味している。判定での勝利を放棄しなくてはならない。(一瞬の夏)

3. 1. 2. 手段＝生成物のむすびつき

かざり名詞は手段を表し、かざられ名詞が生成物を表す場合である。「ある手段を用いてできたN」という関係を作る。この例に見られる「証し」は証明されて作られた事物であり、動作性名詞ではない。「証し」という言葉には生産されてできあがったものという語彙の意味がある。そのため対象＝動作のむすびつきから広がって用いられるようになったのだと考えられる。このタイプのむすびつきは用例がほとんど見られない。しかし、「英語でのレポート」などのように同じタイプの連語が想定できるため、むすびつきの種類として設定しておくべきであろう。

(11) もはや二人のあいだに、言葉での証しは、必要なかった。(新源氏物語)

3. 2. 規定的なむすびつき

3. 2. 1. 状態＝動作のむすびつき

かざり名詞が人や団体の状態を表し、かざられ名詞の動作・事柄を規定するむすびつきである。彭では「平服での勤務」「水着での水泳」「現役での合格」などの例が挙げられている。筆者の用例にも「低い声での会話や忍び笑い」など、少ないながら状態＝動作のむすびつきの例が見られる。「低い声での会話や忍び笑い」では、かざられとなる部分が「会話や忍び笑い」という並列になっている。これは「低い声での会話」や「低い声での忍び笑い」であるため、「低い声での」をかざり、「会話や忍び笑い」をかざられとする。かざられに動作性名詞と非動作性名詞が混ざっている場合は、どちらかに分類しきるのではなく、どちらのむすびつきでも使用できると考える。

彭は規定的なむすびつきを「状態規定的なむすびつき」「根拠規定的なむすびつき」「方法規定的なむすびつき」と分けているが、筆者の収集した例の中に「根拠規定的なむすびつき」と「方法規定的なむすびつき」の例は見当たらなかった。その代わり、彭には挙げられていないタイプのむすびつきが見つかった。

(13) の「ローマ・カトリック教会の許での合同」は、かざり名詞が「その制度、体制下にある」という状態を示し、かざられ名詞の動作を規定している。この分類は、「ローマ・カトリック教会の許」というのを「範囲」であるにとらえると、状況的なむすびつきに近い。彭の分類に状況的なむすびつきの下位分類に当たる「動作の行われる場面のむすびつき」というタイプがある。その例として「不況のなかでの選挙」があり、「ローマ・カトリック教会の許での合同」はこれに近いと思われる。しかし、「ある制度や体制の下にある」というのは場所や場所を抽象化したものではなく、「ある状態におかれている」ということである。さらに、この種の連語は単語と単語の連語のレベルを超えるものとはなるが、「～状態でのN」「～意味でのN」というくみあわせにつながっていく。「～状態でのN」は「ある状態におかれている」ということであるし、「～意味でのN」はNの意味を規定しているということである。一方、かざられ名詞には、「会話」のような言語活動、「合同」「協調」のような「交わり」を表す語、「忍び笑い」「落ち着き」のような「態度」を表す語が来る。

この「～の状態でのN」「～意味でのN」は彭では見られなかった例である。

(12) 皆、彼を意識的に無視して低い声での会話や忍び笑いを続けていたが、(他人の足)

(13) そして、今や新しい活力にあふれているのは、かつてはビザンチンの人々が野蛮と軽蔑した西欧のほうであり、東西の教会の合同も、西側の要求するとおり、ローマ・カトリック教会の許での合同であってもいたしかたない、という結論に達したのである。(コンスタンティノーブルの陥落)

(14) そのような単純なスポーツマンに果して本当の意味での協調ができるかどうか、太郎は疑うのである。(太郎物語・高校編)

3. 2. 2. 状態＝非動作性名詞のむすびつき

かざり名詞が「ある状態である」ことを示し、かざられ名詞が非動作性名詞のむすびつきである。かざりとなる名詞はかざられとなる名詞を「ある状況下にある」ことを規定している。例が少ないためかざられの語彙的意味を詳細に分析することが難しいが、「大名」や「皇帝の名」のようにかざられ名詞が「名」を表し、かざり名詞で規定するタイプのものがある。また、「属性」や「狡猾さ」はそのものの様相や性質を表す。

- (15) 「左様、そういう手もある。届けずに置き、義昭様の御陰謀に加担すれば、おれは来るべき
室町幕府体制での最大の大名になるだろう。」(国盗り物語)
- (16) それは、〈テロリストの回想〉を書いたサヴィンコフに見られる不幸とは、また違った形で
の悲劇なのだ。(風に吹かれて)
- (17) 善と悪というのは人間の根本的な資質のレベルでの属性であって、所有権の帰属する方向と
は別の問題だって言ってたわ」(世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド)
- (18) 用いた手段の、ある意味での狡猾さからくる後味の悪さは、そんな時にしばしば感じたもの
だった。(若き数学者のアメリカ)
- (19) その東ローマ帝国の皇帝だけが、西欧人からすれば、完全な意味での皇帝の名に値したので
ある。(コンスタンティノーブルの陥落)
- (20) 秋がやってくると、彼らの体は毛足の長い金色の体毛に覆われることになった。それは純粹
な意味での金色だった。(世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド)

3. 3. 状況的なむすびつき

3. 3. 1. 空間的なむすびつき

空間的なむすびつきをかざり名詞の側から観察すると、かざり名詞が具体的な場所を示す場合と、具体的な場所名詞から離れ、抽象化した場所を表す場合とが見られる。抽象化した場所とは、「範囲」「ある特定の分野」「場」「場面」のことである。一方、かざられ名詞には動作性名詞と非動作性名詞の場合がある。

3. 3. 1. 1. 具体的場所＝動作のむすびつき

かざり名詞が具体的場所、かざられ名詞が動作性名詞の場合、「その場所でその動作が行われる」という関係を作る。かざり名詞は「コーヒー専門店」「日本」などのような具体的場所で表される。かざられ名詞は「攻撃」「内紛」「出会い」のような人間活動の「交わり」を表すものなどが見られる。

- (21) ニコロは、〈略〉ヴェネツィアのガレー船上に待機していた。海上での攻撃には、ガレー軍
船に優るものはない。(コンスタンティノーブルの陥落)

- (22) 最初はあの「壺番館」というコーヒー専門店での出会いだった。(エディプスの恋人)
- (23) 私は韓国のコミッショナーを説得できないかぎり、日本での開催も不可能だと思っていた。
(一瞬の夏)
- (24) ビザンチン帝国と、西欧での内紛に力をそがざるをえなかったヴェネツィア、ジェノヴァの
二大海洋勢力が対処の機会を逸している間に、(コンスタンティノープルの陥落)
- (25) 「美濃の長井家という権門の出であるがために、妙覚寺での修行がおわると、もう、このよ
うな大寺のお上人さまじゃ。…」(国盗り物語)

3. 3. 1. 2. 具体的場所＝評価のむすびつき

かざり名詞が具体的な場所、かざられ名詞が評価のくみあわせで、「その場所で生じる評価」という関係を作る。かざり名詞は具体的な場所ではあるが、「中国という地域で」ととらえると「範囲」を示すとも考えられる。かざられ名詞が動作を表すものでないものに移行していくとともに、かざり名詞も具体性が薄れ、抽象化していくのだと思われる。かざられ名詞には「評価」「評判」など評価を表す名詞が来る。「評価」は「評価する」という動作を含んだ語彙の意味を持つ。しかし同時に、「評価されて作られた生成物」という意味もある。「アメリカでの成績評価」などがその例で、「成績評価は五段階」ということは、ここでの「評価」は「評価方法」「評価結果」の意味となる。このように、語彙の意味にはさまざまな側面があり、その語彙の意味の広がりから複合連体格の名詞の用法も広がっていくと思われる。実際、「評価」「評判」といった語彙の意味を持つ名詞をかざられ名詞とする連語は動作性名詞だけではなく非動作性名詞からも作られる。「京都での評判」「江戸城多くでの人気」などがそうである。

- (26) 牧谿(<略>中国での評価よりもむしろ日本でもてはやされ、この時代での世界最大の画家とされていた)(国盗り物語)
- (27) アメリカでの成績評価は五段階で、Aが一番良く、B、C、Dと順に悪くなり、Fがfailす
なわち落第となっている。(若き数学者のアメリカ)
- (28) 京は世論の醸成地であり、京での評判が諸国へひろがって天下の世論になる。(国盗り物語)
- (29) 田沼意次が江戸城大奥での人気に神経をくばることは大変なもので、(剣客商売)

3. 3. 1. 3. 抽象的场所＝動作のむすびつき

かざり名詞の場所名詞が具体的ではなく「公けの席」や「世間」のような抽象化された「場」をさしめし、かざられが動作性名詞の場合、「その場で行われる動作」という関係を作る。かざり名詞は具体的な場所ではなく、「その場・場面」といった「範疇」を表す。かざられ名詞には、「挨拶」などの言語活動、「生活」といった抽象的な動作、「信用」などの心的態度が来る。かざられ名詞は具体的な行動を伴うものではなくなっている。

- (30) 公けの席での挨拶は、通り一ぺんのものであるものの（新源氏物語）
- (31) 善良であるだけでは、広い世間での生活は苦しいだろう。（さぶ）
- (32) 事業での信用は傷つき、（人民は弱し 官吏は強し）

3. 3. 1. 4. 抽象的场所＝非動作性名詞のむすびつき

かざり名詞が「その分野・舞台・範疇」という語彙的意味の抽象的场所名詞、かざられ名詞が非動作性名詞の場合、「その分野や舞台で行う物事」という関係を作る。かざり名詞が「大事な場」「花柳界」のように場所や範囲を示すため状況的なむすびつきとしたが、「くせ」「遊び方」がどのような種類のものかを規定していると考え、規定的なむすびつきに近づいているように思う。「漢方での言葉」なども、言葉の種類を規定しているともとらえられる。「漢方での言葉」に見られるように、「言語」「言語活動」がかざられに来ることもある。

- (33) 「謹んで勧請し奉る、本門寿量の本尊」と心中唱えたのは、こういう大事の場での、坊主のころからのくせである。（国盗り物語）
- (34) 「君、人間なんて、花柳界での遊び方を見りゃ大体分るじゃないか」（山本五十六）
- (35) 東郷という人は、＜略＞日本海海戦でのその武勲は高く評価されねばならぬとしても、実際には困る面が多々あったようである。（山本五十六）
- (36) 膿淋とは漢方での言葉で、現在でいう淋疾をさす。（花埋み）

3. 3. 1. 5. 具体的場所＝非動作性名詞のむすびつき

かざり名詞が具体的な場所を示し、かざられ名詞が非動作性名詞の場合、「その場所に一時的に存在するN」という関係を作る。かざられ名詞には、人、物、事が来る。かざられ名詞が場所名詞のときは「一時的に存在する場所」という関係を、時名詞のときは「ある時に一時的にそこに存在している」という関係を作る。いずれにしても、デノ格の名詞の連語が作る関係は、恒常的な存在ではなく、一時的に存在しているという関係である。これは連用格の連語と共通している。

以下、むすびつきのタイプごとに例を挙げる。

1) 具体的場所＝人のむすびつき

- (37) 広島での負傷者は次から次へと近隣の村々へ帰って来る。（黒い雨）
- (38) 四十歳を越えての子だけに可愛さは一入なのかもしれない。そこには塾での厳しい師の面影はなかった。（花埋み）
- (39) 美濃での道三の家来は、他家に類がないほど、その主人の道三に心服している。（国盗り物語）

2) 具体的場所＝物のむすびつき

- (40) 須磨での日常の調度は、必要最低限なものにとどめ、(新源氏物語)
- (41) なにより精神医学の本場独逸での最新の知識を三年半にわたって吸収してきた筈の自分である。(楡家の人びと)
- (42) 紫の君は涙をふきつつ、旅先での夜具や、堅織の、白い直衣・指貫、いまの源氏は無官の身とて、無紋のものをととのえるよう、かいがいしく指図するのだった。(新源氏物語)

3) 具体的場所＝事のむすびつき

- (43) 電車の中での出来事は、時間の裂け目に陥ち込んで消え去ってしまった。(砂の上の植物群)
- (44) さてロンドンでの会議の方は、十一月、十二月と進み、(山本五十六)
- (45) 源氏は、御所での齋宮の別れの儀式を見たかったが、(新源氏物語)

4) 具体的場所＝場所のむすびつき

- (46) 「京での宿は、明智屋敷にするぞ」(国盗り物語)
- (47) これで未亡人とりよとの、江戸での居所さえ極めて置けば、(護持院原の敵討)
- (48) 筑紫での住居も、かの地にしては存分の贅沢をつくしたものであったが、(新源氏物語)

5) 具体的場所＝時のむすびつき

- (49) もともと人一倍、土に対する親近感を持っていたのだが、それがアナーバーでの一年の間に、ある種の憧れにまで変質していたらしく、(若き数学者のアメリカ)
- (50) あの三條邸での一夜は、魔に魅入られたからとしか、思えない。(新源氏物語)
- (51) 留置場での半日、行助のなかをしめたのは、美しい母にたいしての愛惜と、修一郎を赦せない、という感情だった。(冬の旅)
- (52) 烈しかったのは、あの舞鶴での少年時代だけのことであって、(錦繡)
- (53) マニサでの日常も、以前のそれとは、まったくちがった気分支配されるものであったにちがいない。(コンスタンティノーブルの陥落)

3. 3. 1. 6. 場所＝態度のむすびつき

かざり名詞が「範囲」「場面」を指し、かざられ名詞が態度や感情の名詞のむすびつきである。「その場で振る舞う態度」という関係を作る。

- (54) 「もし、それが事実なら、公判廷での態度でわかるでしょう。(冬の旅)
- (55) アダチさんが事務室でウイスキーをのんでいる光景を見ながら、ぼくはその夫婦の家庭での姿もおそらくそっくりそのままなのだろうな、と思った。(新橋烏森口青春篇)

3. 3. 1. 7. 場所＝感情のむすびつき

かざり名詞が「範囲」「場面」を指し、かざられ名詞が態度や感情の名詞のむすびつきである。「その場で起こる感情」とい関係を作る。

- (56) 島での悲しみはすっぱり捨ててしまおうと (放浪記)

3. 3. 1. 7. 場所＝立場のむすびつき

かざり名詞が場所を示し、かざられ名詞が立場や社会的位置を示すむすびつきである。かざり名詞は場所や範囲を表し、かざられ名詞は「立場」を示す。「その場での立場」という関係を作る。この種のむすびつきは連用の連語で言い換えることが難しい。

- (57) 同じキリスト教国であるビザンチン帝国の援軍要請を断わっては、西欧でのわが国の立場が微妙なものになるのを避けられない。(コンスタンティノープルの陥落)
- (58) 父は会社でのあなたの立場を言っているのだということが、(錦繡)
- (59) しかも彼ら四人にこの舞台での役割は何もないのである。(エディプスの恋人)

3. 3. 1. 7. 場所＝関係のむすびつき

かざり名詞が場所、かざられ名詞が関係を表すむすびつきである。

- (60) 「ここでの友達関係はどうだね？」(冬の旅)

3. 3. 1. 8. 場面＝動作のむすびつき

かざり名詞がある場面を差し出し、かざられ名詞が動作を差し出すむすびつきである。「その場面における動作」という関係を作る。

- (61) もっとクリティカルな場面での山本の発言にまで同じような手心が加えられると、山本五十六像は歪んで来るのではないであろうか。(山本五十六)
- (62) 雪の中でのビパークには自信があった。(風に吹かれて)

3. 3. 1. 9. 場面＝非動作性名詞のむすびつき

かざりが場面をさしだし、かざられが非動作性名詞となったとき、場面＝非動作性名詞のむすびつきを作る。

- (63) 現在の結婚式での誓いの言葉に近いものだが、(花埋み)
- (64) 自分の才能・技術が高く評価されるほど人生での幸福はないであろう。(国盗り物語)

3. 3. 2. 時間的なむすびつき

3. 3. 2. 1. 時間＝動作のむすびつき

かざり名詞に時間や時間の断面を表す語が来ると時間的なむすびつきを作る。かざられ名詞は動作性名詞の場合と、非動作性名詞の場合とがある。かざられ名詞にはここでは「決意」が来ている。「決意」は「判断」や「評価」といった心的態度と近いところにある。上述した具体的場所＝評価のむすびつきの例もある。かざりが状況的な名詞でかざられが心的態度の名詞というのはむすびつきやすいのかもしれない。

- (65) まだ四十歳の働き盛りでのこの決意は、トルコ国民だけでなく、西欧の人々にまで、意外の感を与えずにはおかなかったが、(コンスタンティノープルの陥落)

3. 3. 2. 2. 時間＝非動作性名詞のむすびつき

- (66) 彼女の生涯での最も幸福な短い時間を味わったのであった。(山本五十六)

3. 3. 3. 原因的なむすびつき

デノ格が原因的なむすびつきを作ることがある。筆者の用例には例が見られなかった。彭はかざり名詞に動作・状態性名詞が表れ、かざられ名詞は結果として生じてくる動作、変化あるいは状態を表すときにこのむすびつきになると述べている。そして「性交渉での感染」「仕事でのつかれ」という例を挙げている。

3. 4. まとめ

デノ格の名詞と名詞とのむすびつきを表にまとめると下のようになる。

表2 デノ格の名詞と名詞とのむすびつき一覧

対象的	手段＝動作のむすびつき	書面での報告
	※手段＝生成物のむすびつき	言葉での証し
規定的	状態＝動作のむすびつき	低い声での会話
	※状態＝非動作性名詞のむすびつき	室町幕府体制での大名
状況的	空間的なむすびつき	
	具体的場所＝動作のむすびつき	海上での攻撃
	具体的場所＝評価のむすびつき	中国での評判
	抽象的場所＝動作のむすびつき	公けの席での挨拶
	※抽象的場所＝非動作性名詞のむすびつき	大事な場でのくせ
	※抽象的場所＝事物のむすびつき	漢方での言葉
	具体的場所＝非動作性名詞のむすびつき	

状況的	※ 具体的場所＝人のむすびつき	塾での厳しい師
	※ 具体的場所＝物のむすびつき	旅先での夜具
	※ 具体的場所＝事のむすびつき	電車の中での出来事
	※ 具体的場所＝場所のむすびつき	京での宿
	※ 具体的場所＝時のむすびつき	アナーバーでの一年の間
	※場所＝態度のむすびつき	公判廷での態度
	※場所＝感情のむすびつき	島での悲しみ
	※場所＝立場のむすびつき	西欧でのわが国の立場
	※場所＝関係のむすびつき	ここでの友達関係
	場面＝動作のむすびつき	クリティカルな場面での発言
	※場面＝非動作性名詞のむすびつき	結婚式での誓いの言葉
	時間的なむすびつき	
	時間＝動作のむすびつき	働き盛りでの決意
	※時間＝非動作性名詞のむすびつき	生涯での幸福な短い時間
	原因的なむすびつき	

今回、彭の分類と最も大きく異なる点は、かざられが動作・状態性名詞でないむすびつきを明確に分けたことである。つまり表2の※印の部分を立てたことである。もちろん、この中のいくつかのむすびつきはすでに彭に指摘があった。しかし、動作性名詞か非動作性名詞かで連語のタイプも異なるはずなので、この点は明確に分けた分類を行うべきであろう。これを見ると、かざられ名詞に非動作性名詞が来るむすびつきは多い。むすびつきの数と用例数がすぐ比例するわけではないが、かざられ名詞が動作性名詞にばかり着目するのではいけないということが分かる。

対象的なむすびつきの場合、かざり名詞に手段を表すものが来る。かざられ名詞には動作性名詞、非動作性名詞のどちらも来ることができる。それぞれ、「ある手段を用いた動作」「ある手段によって生じたN」という関係を作る。かざられが非動作性名詞である場合は、かざられが動作性名詞のものから展開したものではないかと想像できる。しかし、デノ格の名詞のむすびつきでは、対象的なむすびつきの例は少ない。

規定的なむすびつきはかざり名詞がある状態を差し出し、かざられ名詞は動作性名詞の場合と非動作性名詞の場合とがある。「ある状態のもとでの動作」「ある状態のもとにあるN」という関係を作る。かざり名詞は、かざられ名詞をどのような状態であるか規定しているという意味では、形容詞のような働きをしていることになる。このむすびつきは、二単語以上の連語となったとき、以下の例のように、さらなる広がりを展開していく可能性がある。

- 67) 自分たちの存在が相手に絶対に必要であるとはいえない状態での中立ほど、むずかしい課題はないのだ。(コンスタンティノーブルの陥落)

「ある状況下にある」ことや「ある状態」であることが規定できる範囲は広く、現段階でかざられ名詞の語彙的意味を特定することは困難である。

状況的なむすびつきにおいては、「一時的にそこに存在する」という関係が作られたときに連語のタイプがさまざまに広がっていくのだと思われる。かざりは、主に場所を差し出す。具体的な場所を差し出す場合もあるが、場所が抽象化した「範囲」「ある特定の分野」「場」「場面」などを差し出す場合もある。また、時間を差し出す場合もある。かざられ名詞は、動作名詞の場合もあるが、評価、さまざまな非動作性名詞の例も見られた。具体的場所＝評価のむすびつきでは、かざられる「評価」という動作性名詞が、「評価」「評判」という語彙的意味との関連から、非動作性名詞である「評判」や「人気」をかざられとする連語へ発展したのではないかということを見た。場所名詞をかざりとする連語では、かざられ名詞に「人」「物」「事」「場所」「時」「態度」「感情」「立場」「関係」などの非動作性名詞が来ることが観察された。共通するのは、常時そこに存在するのではなく「一時的に存在する」という関係である。このとき、かざりとなる場所名詞も「人」「物」「事」などのかざられ名詞も完全な非動作性名詞であるが、私たちはどうしてもそこに動詞を補って意味を読み取ろうとする。その動詞は「する」「いる」「ある」「生じる」「存在する」「過ごす」などである。たとえば、「広島での負傷者」は、「広島にいる負傷者」であり、「須磨での調度」は「須磨にある調度」、「電車の中での出来事」は「電車の中で起きた出来事」である。しかし、これを一つ一つのくみあわせについて説明するのでは意味がない。同じむすびつきで同じ動作が補われるわけでもない。「アナーバーでの一年の間」は「アナーバーにいたときの一年の間」であるが、「三條邸での一夜」は「三條邸で過ごした一夜」である。さらに、「アナーバーでの一年の間」は「アナーバーにいたときの一年の間」と過去の一時期を表すが、「京での宿」は「京都にいたときの宿」と、反復を表す。しかし現段階で、なぜ私たちはこれらの動詞を介在させて意味を読み取るのか、どんなときにどんな動詞を補って読み取るのかについてはまだ明らかではない。もしかすると、これらは連語論の中では解決せず、構文論の中で解決しなければならない問題なのかもしれないが、さらなる分析が必要であることは間違いない。

4. 連用連語との比較

次に、今回の分類と連用連語との比較をする。デ格について連語論的な観点から分析した論文に奥田（1983）がある。奥田はデ格の連語を対象的なむすびつき、規定的なむすびつき、原因的なむすびつき、空間的なむすびつきからなるとし、単語のカテゴリカルな意味と文法的な結合能力からその体系性について説明した。そのカテゴリカルな意味と一般化されたタイプ、用例を下に挙げる。

対象的なむすびつき

- ＜手段＞ [具体名詞] デ [具体的な動作を示す他動詞] …リボンで髪をたばねる
- ＜原料・材料＞ [具体名詞] デ [生産動詞] …足袋を紙でこしらえる
- ＜判断・想像活動の材料＞ [判断・想像活動] デ [心理動詞] …番頭の話で想像された

規定的なむすびつき

- {<動作の状態> [状態性名詞] デ [動詞] …腕まくりで原稿を書いていた
- {<状態規定> [状態性の抽象名詞] デ [動詞] …皮肉な調子で言った

原因的なむすびつき

- {[現象・動作・状態名詞] デ [自然現象、生理現象を表す自動詞] …風で木が折れた

空間的なむすびつき

- {[国・地域・都市の名前] デ [動詞] …東京で働く
- {[現象名詞の空間化] デ [動詞] …闇の中で斎田のことを考えていた
- {[組織] デ [動詞] …この署名者はフランス社会で尊敬されている

連用連語では、対象的なむすびつきは「手段」「原料・材料」「判断・想像活動の材料」であるが、連体連語では対象的なむすびつきは「手段」しかない。「原料・材料」という意味は、連体連語では表現できない。「判断・想像活動の材料」のような想像活動と心理動詞のくみあわせの場合、カラノ格を用いると使用が可能になることがある。規定的なむすびつきは連用連語で「動作の状態」と「状態規定」であるが、連体連語にはどちらも存在する上に、連用連語より広い範囲で使用することができる。それが「ある状態のもとでのN」というタイプである。原因的なむすびつきは、連用連語にも連体連語にも存在するが、連用連語ではよく使用されるのに対して連体連語には用例数が少ない。空間的なむすびつきは、連用連語では動作の行われる場所と範囲を表しているが、連体連語では、連用連語にはないさまざまな関係も作っている。「ここでの友達関係」などのような場所＝関係のむすびつきでは連用連語で表現することはできなくなる連体連語独自のタイプである。

5. おわりに

今回、デノ格の名詞と名詞とのくみあわせについて、その体系を明らかにしようとした。特にかざられ名詞が動作名詞か非動作名詞かに注目してかざり名詞とかざられ名詞の語彙の意味を考察した。彭に指摘のなかったむすびつきについても指摘した。

複合連体格の名詞のくみあわせは、連用格からの移行から始まったことは明白であろう。その意味ではかざられ名詞が動作性名詞の場合は移行の経緯がわかりやすい。しかし、かざられが非動作性名詞のむすびつきも多く見られる。この、かざられを非動作性名詞とするむすびつきへの展開は、どのような順序で、どのようなメカニズムで起こったのか、未だ明白でない。さらに、かざられ名詞が動作性名詞の場合であっても、連用連語の全ての用法が連体連語に移行しているわけではない。今回は連用連語と連体連語で、どこにズレがあるのかの記述は行った。しかし、その要因を見出すに至らなかった。これらは今後も検討を続けたい。

名詞と名詞をつなぐつなぎ方としては他に後置詞がある。今回、デノ格の連語と後置詞が競合す

るところがいくつかあった。手段を表す「～による」「～によつての」と場所を表す「～における」「～においての」である。今後、複合連体格と後置詞との違いも明らかにしていきたい。

<参考文献>

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 奥田靖雄（1983）「で格の名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房
- 大平真紀子（2011）「ヘノ格の名詞と名詞とのくみあわせ—かざられが動作・状態性の名詞の場合—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』32巻pp. 43-63
- グループKANAME編（2007）『複合助詞がこれでわかる』ひつじ書房
- 言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房
- 国語学会編（1980）『国語学大辞典』東京堂
- 国立国語研究所編（2004）『分類語彙表—増補改訂版』大日本図書
- 鈴木康之（1978）「ノ格の名詞と名詞との組み合わせ」『教育国語55, 56, 58, 59』
- 高橋太郎（2005）『日本語の文法』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法2 第3部格と構文 第4部ヴォイス』くろしお出版
- 彭広陸（1999）「複合連体格の名詞を《かざり》にする連語」『ことばの科学』9 むぎ書房pp.99-193

<用例出典>

CD-ROM版『新潮文庫の100冊』

女社長に乾杯！（赤川次郎）、山本五十六（阿川弘之）、羅生門・鼻（芥川龍之介）、砂の女（安部公房）、小さな者へ・生れ出づる悩み（有島武郎）、華岡青洲の妻（有吉佐和子）、剣客商売（池波正太郎）、焼跡のイエス・処女懐胎（石川淳）、一握の砂・悲しき玩具（石川啄木）、青春の蹉跎（石川達三）、歌行燈・高野聖（泉鏡花）、風に吹かれて（五木寛之）、野菊の墓（伊藤左千夫）、ブンとフン（井上ひさし）、あすなろ物語（井上靖）、黒い雨（井伏鱒二）、沈黙（遠藤周作）、死者の奢り・飼育（大江健三郎）、野火（大岡昇平）、パニック・裸の王様（開高健）、檸檬（梶井基次郎）、雪国（川端康成）、榆家の娘びと（北杜夫）、聖少女（倉橋由美子）、モーツァルト・無常という事（小林秀雄）、一瞬の夏（沢木耕太郎）、新橋烏森口青春篇（椎名誠）、コンスタンティノーブルの陥落（塩野七生）、小僧の神様・城の崎にて（志賀直哉）、国盗り物語（司馬遼太郎）、破戒（島崎藤村）、太郎物語（曾野綾子）、二十歳の原点（高野悦子）、ビルマの豎琴（竹山道雄）、人間失格（太宰治）、冬の旅（立原正秋）、新源氏物語（田辺聖子）、痴人の愛（谷崎潤一郎）、エディプスの恋人（筒井

康隆)、二十四の瞳 (壺井栄)、李陵・山月記 (中島敦)、こころ (夏目漱石)、孤高の人 (新田次郎)、アメリカひじき・火垂るの墓 (野坂昭如)、放浪記 (林芙美子)、にぎりえ・たけくらべ (樋口一葉)、草の花 (福永武彦)、若き数学者のアメリカ (藤原正彦)、人民は弱し官吏は強し (星新一)、風立ちぬ・美しい村 (堀辰雄)、点と線 (松本清張)、塩狩峠 (三浦綾子)、忍ぶ川 (三浦哲郎)、人生論ノート (三木清)、金閣寺 (三島由紀夫)、雁の寺・越前竹人形 (水上勉)、銀河鉄道の夜 (宮沢賢治)、錦繡 (宮本輝)、友情 (武者小路実篤)、世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド (村上春樹)、山椒大夫・高瀬舟 (森鷗外)、遠野物語 (柳田国男)、さぶ (山本周五郎)、路傍の石 (山本有三)、戦艦武蔵 (吉村昭)、砂の上の植物群 (吉行淳之介)、花埋み (渡辺淳一)